

interview

山花 令子 先生

知識や技術だけではなく「気づく」こと、それがより良い実践につながるから。

●やまはな・れいこ

武蔵野大学通信教育部 人間科学部 人間科学科
看護学コース 准教授
博士(看護学)(東京都立大学人間健康科学研究科)



山花先生の看護師として、研究者として、

そして教育者としての

ご経歴を教えてください。

私は臨床実践の経験が長く、主に血液悪性疾患の治療である造血細胞移植に携わってきました。私がこの治療に関わり始めた数十年前は、現在のよう移植の選択肢が多くなく、ドナーが得られず命を落とす患者さんもいました。そして、移植治療の経過は容易ではなく、患者さんは身体的・精神的苦痛に加えて、実存的な苦悩であるスピリチュアルペインを抱えているのではないかと考えるようになったのが私の研究の出発点となりました。

また、臨床経験を重ねる中で、看護師教育を介して患者ケアの質向上に貢献したいという思いが強まりました。とくに血液疾患領域において、どのような段階的教育が看護実践の質的向上につながるのかという教育的課題に取り組んできました。

これらと並行して看護実践そのものの本質や構造に関する研究も進めています。具体的な研究内容としては、看護師が修得すべき実践能力を初心者レベルから達人レベルまで体系的に示す試みや、気づきがどのように生まれるかを明らかにする研究などがあります。というのも、看護師が日々の実践を遂行するためには、ケアに関する知識や技術だけでなく、その背後にある様々な要因が密接に関連していると考えているからです。

武蔵野大学通信教育部で看護学を教える際に工夫されていることはどんなことですか。

私が授業で意識しているのは、得られた知識が可能な限り翌日からの現場での思考や実践につながるような内容を提供することです。本学に学びに来てくれている皆さんは、モチベーションの高い学生さんですので、貴重な出会いに繋がっていると感じることがあります。

スクーリングでは、看護実践から離れている方から、新人看護師、さらに豊富なキャリアをもち看護管理者研修に参加しているような方まで、さまざまな背景の受講生が参加されています。こうしたキャリアの違いは相乗効果を生むようで、グループワークでは経験の浅い受講生から「経験豊富な先輩の話が聞いて勉強になった、一緒に働きたかった」といった言葉を得る場面もあります。

レポートについては、受講生が現在抱えている迷いや困りごとの問題解決につながる可能性を大切にしています。以前は多くの箇所にもーカーを引いて返却していましたが、受講生がショックを受けてしまうのではないかと考え、最近は青字や赤字で次の学びにつながるコメントを書くよう工夫しています。

心理学専攻の専門・応用科目でも履修できる「エンド・オブ・ライフケア」では、

緩和ケアにまつわる課題にも注力されているそうですね。

緩和ケアとは、生命を脅かす疾患に直面している患者さんとそのご家族が抱えるさまざまな問題を適切に評価し、QOLの向上を目指してアプローチしていくケアです。

大切なのは、痛みやその他の身体的・心理社会的・スピリチュアルな問題を早期に見出し的確に評価を行い対応することです。そのため、ケースに応じて、主治医のみならず、看護師、薬剤師、理学療法士、精神科医など多職種がディスカッションを行い、互いの専門性を尊重しながら支援を進めていきます。

その中で看護師は、患者さんやご家族・利用者さんと日常的に関わる時間が長いことから、看護の対象となる方のニーズを把握するうえで非常に重要な役割を担っています。

看護師が患者さんの変化やニーズに気づかなければ、チームに必要な情報を発信できず、適切なケアに結びつけることが難しくなります。この点は非常に重要だと思います。

対人支援を行う上で一番大切にしている

心がけはどのようなものですか。

経験を重ねて知識が増えてくると、自分の価値観や経験に基づいて直観で状況を捉えることがあります。

経験の蓄積によって生まれる重要な判断資源ですが、思い込みや慣れが影響していることがあります。そのため、一旦その直観的判断を脇に置き、今何が目の前で起こっているかを丁寧に確認すること、周囲の意見や考えを受け取れる謙虚さが大切だと考えています。

通信教育部で看護を学ぶ学生に

メッセージをお願いします。

この大学には、さまざまなキャリアと目標を持つ方々が在籍しています。仕事をしながら学ぶことは、単位取得や時間管理などには工夫が必要ですが、皆さん改めて看護を学びたい、海外留学や大学院進学といった目的が明確であることは大きな強みになります。

皆さんがここで学んだことを臨床や地域で活かし、社会に貢献していただくことを心から願っています。

対人支援をする側のセルフケアに

関してはいかがでしょうか。

私たちは、患者さんや利用者さんの喜怒哀楽に合わせて自分の感情を調整しながら関わることが多く、共感によって疲れてしまうこともあります。そんなときには、「自分はいま苦しい」と感じている状況を同僚と共有することがとても大切です。

個人情報に配慮して、休憩室などで、対象者を批判するのではなく「この方のこうした反応が、私にはつらい」といった客観的な表現で、自分のつらさを表現してみます。それによって、自分の気持ちが整理され、感情労働に伴う負担感や共感疲労がやわらぐことも少なくありません。抱え込まないこと—これは対人支援に携わる上で非常に大切だと思います。

自分の苦しさやつらさを抱え込まないことが、対人支援をしていく上では大切です。

Information

山花先生主催、看護学コースの皆さんのための「月イチサポートラウンジ」が縁バス上で行われています。

▲今後の予定▲

2月4日(水) 16-19時 3月4日(水) 16-19時

